

森と水とやすらぎの里

くにがみそん

国頭村

- 面積-----194.80km²(県内4番目の広さ)
- 位置-----北緯26度、東経128度付近
- 人口-----5,632人(平成19年3月末現在)
- 村鳥-----ヤンバルクイナ
- 村花-----ヤマジャックワ(桜つつじ)
- 村花木-----イジュ
- 村木-----シイジャー(イタジイ)
- 村魚-----イラブチャー(アオブダイ)

自然との共存で

「夢と潤いと安らぎのある村づくり」

沖縄本島最北端に位置する国頭村は、東は太平洋、西は東シナ海に面し、面積の約90%が山林原野です。村の中央部には本島最高峰の与那覇岳(503m)や伊湯岳などの山々が連なり、いくつもの川が流れ、ダムが建設されています。まさに自然の美しさに恵まれた「森と水とやすらぎの里」です。県民の水瓶としてだけでなく、国の天然記念物「ノグチゲラ」や「ヤンバルクイナ」等の貴重な生物の生息地としても注目を集めています。



やんばるの特性を活かした産業振興

産業はサトウキビや茶、パイナップル、柑橘類の栽培などの農業が主体で、近年は花き栽培も盛んになりつつあります。また、養豚の他、漁港整備にもなってソデイカ漁なども盛んになっています。国頭村では自然環境を活かし、地域と連帯しながら観光産業の振興にも取り組んでいます。



奥間の大綱引き

350年余の歴史を誇る奥間の大綱引きは、2年に一度、豊年祭と交互に開催されるイベント。エイサーや獅子舞で景気をつけた後、ドラや鐘、ほら貝の音が鳴り響く中、南北両軍の若按司が全長4メートルの巨大ヤンバルクイナや、さまざまな手作りちょうちんを伴い、参加者を鼓舞します。



毎月第3金曜日・土曜日は、「おきなわ食材の日」です。



国頭サバクイで氣勢を上げながら、山路で重い御材木を運ぶ人々



奥間の 国頭サバクイ

くんじゃん

首里城建築の御材木を運ぶ、 勇壮な木やり唄「国頭サバクイ」

国頭サバクイは沖縄を代表する有名な山唄、木やり唄で、一六〇〇年前後に生まれたという説があり、その発祥の地は国頭村の奥間とされています。

この唄は、首里城を建てるために使われる「御材木」を国頭の山奥から切り出し、ふもとの川沿いの鏡地(かがんじ)まで運ぶときに唄われました。鏡地からはやんばるの船で那覇まで運びましたが、重い材木を切り出して山路を運ぶ作業は大きな危険を伴う重労働。老いも若きも男も女も、多くの農民たちがかり出され、男たちは丸太をはさんで棒をかけ、女たちは丸太を引く綱をにぎって交互に氣勢をあげました。ほら貝や指笛ではやしたてながら陽気な労働歌「国頭サバクイ」を唄うことで、過酷な作業の疲れを癒して気持ちを高めました。

ちなみに「サバクイ」とは、琉球王朝時代の地方役人の役職名で、奥間には間切の番所(今の村役場)が置かれていたそうです。首里城の北殿が落成し

た際、国頭間切のサバクイが、この唄を歌い、面白おかしく踊りました。それが全島から来ていた間切役人たちの間で評判になり、各地に広まったと伝えられています。

国頭サバクイの魅力は、野太い男たちの声の力強さ。国頭村では、山との深い関わりを表わすこの唄を今でもしっかりと守り続けています。

民謡とわらべうたで巡る
ふるさと唄紀行

監修 ● 仲宗根幸市

県内各地に残る民謡やわらべうたは、懐かしい風景や

当時の暮らしの息づきを伝えてくれます。

うちなぐの唄が誘う地域の旅へ、まじゅん行かな(さあ出かけましょう)!

一.サー 国頭(くんじゃん)サバクイ

ユイシーユイシー

サー 酒ぬりサバクイ

ハレルレーハーラーレー

ユサハリガユイササ

二.サー 国頭山から

サー 出(い)だちやる御材木(うぜむく)

(囃子略)

三.サー 老(う)いて若さん

サー 皆肝あわちよて

四.サー 鏡地浜(かがんじはま)から

サー 乗(ぬ)したる御材木(うぜむく)

(雨降りば)

くぬ木やくぬ木や

重さぬ引からんくぬ木や

大和車に乗して引かさや

ヤリクヌハイヤイスリヨ

ヤリフヌ

(標準語訳)

国頭サバクイ、酒呑みサバクイ、

国頭の山から出した材木、

老いも若きも、皆心を合わせて、

鏡地の浜からのせた材木、

(雨降りば)

この木はこの木は、

重くて引っぱりにくい、

大和車にのせて引かさや

出典「琉球列島・島った紀行」 仲宗根幸市編著

ていだサンサン
食べたらがんじゅう沖縄産!